



いこいの広場

広場って、どんな場所かな。
どんな人が、何のために来る所だろう。



ぼくの家の近くには、小さな広場がある。ベンチが置いてあるこの広場を、近所の人たちは、「いこいの広場」とよんでいる。

ある日、小さな弟にせがまれて、この「いこいの広場」に遊びに行った。広場では、めがねをかけたおじさんが一人、ベンチで本を読んでいた。ぼくたちは広場のはしの方で、持ってきた弟のおもちゃで遊ぶことにした。

しばらくすると、二人の中学生がやって来て、キャッチボールを始めた。この広場は、ボール遊びができるほど広くない。なんとなく気になっていたそのとき、「君たち、野球はもっと広い所でやってくれないかな。」



と、とつぜん大人の声^{おとな}がした。ふり向くと、ベンチで本を読んでいたおじさんが、中学生たちに向かって話しかけていた。

「ここが、野球ができるほど広くないということは、ぼくたちだって分かっています。でも、ぼくたちはただ、キャッチボールをしているだけです。バットをふっているわけじゃないし、周りの人に迷^{めい}わくをかけているつもりはありません。」

話しかけられた中学生の一人^{ひとり}が答えた。「確かにキャッチボールかもしれないが、手がすべって、どこかにボールが飛んでいくかもしれない。そうなるよ、わたしや、あそこで遊んでいる子たちにも迷^{めい}わくがかかるじゃないか。」

「そうならないように、気をつけてやっています。」
「気をつけていても、失敗はあるだろう。その失敗で、小さい子がけがをしたら、迷^{めい}わくどころの話ではなく

なるよ。」

「でも、ぼくらは気をつけていますし——」。

そのとき、もう一人の中学生が、話にわって入った。

「やっぱり、他の場所でやろう。キャッチボールぐ

らいて、あれこれ言われたくないじゃないか。」⁵

「だって、ぼくらは、十分気をつけてやっているよ。

それにここは、みんなの広場だろう。ぼくらが

キャッチボールをしたって、いいじゃないか。」

おじさんと話していたほうの中学生が、言い返す。

「もう、説明するのもめんどくさいよ。どこか、¹⁰

うるさい人のいない所をさがそう。」

それ以上何も言わず、中学生たちは広場から立ち

去った。

おじさんは、何事もなかったかのように、また本

を読み始めた。¹⁵

静かになった「いこいの広場」で、ぼくは弟と遊

びながら、中学生たちの会話を思い起こした。もし、
ぼくがあの中学生たちだったら、どうしただろう。
キャッチボールを注意したおじさんに、何と言っ
ただろう。



編集委員会作 ◆ 北沢優子 絵



考えよう・話し合おう

責任ある行動とは、どんなものだろう。

●二人の中学生がキャッチボールを
しているのを見て、「ぼく」がなんとなく
気になっていたのは、なぜでしょう。

◎「それにここは、みんなの広場だろう。」

「ぼく」は、どう思ったでしょう。

●あなたは、二人の中学生に足りなかったのは、
どのような考えだと思いますか。



つなげよう



自分で考えて行動することは、
簡単ではないかもしれないね。
そんなとき、今日の学習を
思い出そう。